



文化庁委託事業「平成29年度戦略的芸術文化創造推進事業」

文化庁

「フランチャイズ・オーケストラを中心とした 市民のクオリティ・オブ・ライフの 調査と向上のための事業」

事業報告書



TOKYO SYMPHONY ORCHESTRA

Jonathan Nott, *Music Director*

公益財団法人 東京交響楽団

はじめに

東京交響楽団は2002年に川崎市とフランチャイズ提携を結び、2004年にミュージア川崎シンフォニーホールがオープンしてからは新たな拠点として川崎定期演奏会や名曲全集シリーズ、0歳からのオーケストラなど数多くの演奏会を行うほか、市内学校での教育事業、児童・老人施設等への巡回公演など、地域に親しまれるオーケストラを目指して演奏活動をしてまいりました。

震災の影響でホールが使えなくなってしまう時期もありましたが、川崎での活動を始めて15年に迫ろうとしています。果たして私達の今までの活動は地域の皆様の「クオリティ・オブ・ライフ」にどのように影響したのか。今回はその調査をしてみました。

世界的な指揮者、演奏家から評価の高い音響を誇るミュージア川崎シンフォニーホールでの東京交響楽団の演奏は、ハイレベルな芸術創造発信によって川崎市のブランドイメージを

高め、まちづくりへ貢献しているという自負はありますが、そのオーケストラが0歳から入場できるコンサートを開催したり、川崎市の小学校の音楽鑑賞教室に出演したり、市内のコミュニティ施設でのアウトリーチ活動などを展開していることが地域の皆様にどのように受け入れられているのか。どうぞご高覧ください。

今後、私共東京交響楽団のように地域に根ざした活動を展開していく芸術団体、または芸術団体を何らかの形で地域に呼び込もうと計画をされている自治体ならびに各種文化施設にとってこの調査がその推進の一助になることを願っております。

最後になりましたが、この調査にご協力をいただいた皆様に御礼申し上げます。

公益財団法人東京交響楽団
専務理事・楽団長 大野 順 二

目次

- はじめに 2
- 研究会の目的と概要 3
- 「新・文化芸術基本法」時代におけるフランチャイズ・オーケストラの意義 5
- 市民のQOLをいかに把握するか ~評価モデルと調査手法・調査票~ 9
- フランチャイズ・オーケストラの課題と展望 ~オーケストラとクオリティ・オブ・ライフ~ 13
- 東京交響楽団の活動と川崎市民のQOL ~調査結果サマリー①~ 16
- フランチャイズ・オーケストラがより市民に役立つ存在になるために
~調査結果サマリー②~ 19
- フランチャイズ・オーケストラと市民 21
- フランチャイズ・オーケストラと活動拠点 23
- 事業報告 ファンタスティック・オーケストラ ~みんなで集えるコンサート~ 25



写真左上から(時計回り) 川崎定期演奏会(©大窪道治)、0歳からのオーケストラ(©Hikaru.☆)、かわさき区ピアノコンサート(アウトリーチ)、ミュージア川崎での楽器体験ワークショップ(写真提供:キヤノン株式会社)

研究会の目的と概要

文化庁委託事業 「平成29年度戦略的芸術文化創造推進事業」 『フランチャイズ・オーケストラを 中心とした 市民のクオリティ・オブ・ライフの 調査と向上のための事業』

趣旨と目的

近年、自治体ならびに地域文化を担う文化振興財団と、オーケストラをはじめとした芸術団体がパートナーシップを結び、文化芸術の発展のための創造活動や、地域の教育や社会貢献・文化振興に取り組む事例が増えている。一方で、芸術団体の文化的資産をどう生かすか、行政との連携、草の根的な事業の評価方法などさまざまな課題も見えてきている。

2004年より川崎市のフランチャイズ・オーケストラとして活動している東京交響楽団がミュージアム川崎シンフォニーホールで行う楽団主催公演(年間5公演)や川崎市文化財団との共催公演(年間約20公演)に加え、地域に根差した活動の中で、それらが地域に及ぼす影響に対して、科学的なデータ収集、分析を行うものである。フランチャイズ・オーケストラを持つことが、市民のクオリティ・オブ・ライフを向上させ、豊かな社会を作るといふ仮説のもと、川崎から全国へ広がるモデルケースとして発信していけるデータを示すための、調査、研究、および実演を行う。

概要

1)市民のクオリティ・オブ・ライフに関わる調査・研究

a)高齢者に対する調査ならびにクオリティ・オブ・ライフの向上に係る取り組み

川崎で音楽鑑賞をしている65歳以上の聴衆(東京交響楽団川崎定期会員など)に対して、生活の変化についてアンケートならびにインタビュー形式にて調査する。

そこから得られた情報をもとに社会包摂研究会を実施。次回

調査票の項目を検討し調査を深めていく。また、クオリティ・オブ・ライフの向上に係る取り組みとして、社会包摂(加齢や病気によるハンディキャップなども考慮)の観点からハンディキャップのある方の芸術鑑賞へのアクセスのしやすさについても取り組み、川崎定期演奏会での点字プログラムを準備する。そのほか、社会包摂研究会で出てきた課題について取り組みを進めて、2018年3月社会包摂研究会の報告会の実施ならびに報告書の発行を行う。

b)子育て中の保護者への調査・公演

2007年から続けている「0歳からのオーケストラ」や、市内アウトリーチ活動が保護者や子どもに対して与えた影響を保護者へのアンケートならびにインタビュー形式にて調査。

文化芸術への参加機会をさらに広げるため、東京交響楽団メンバーによるアンサンブルコンサート「0歳からのオーケストラ・ミニ キャラバン」(1時間程度のコンサートとワークショップ)を川崎市内の公共施設にて実施。その会場などでのアンケート調査を実施する。得られた結果については社会包摂研究会へ提供し、クオリティ・オブ・ライフの向上に係る取り組みや報告会・報告書に反映する。

実施日

「0歳からのオーケストラ・ミニ キャラバン」

1.	子育てサロンこすぎ (会場:中原中学校) 協力:子育てサロンこすぎ	2017年 12月20日(水)	約40組
2.	パピママパークこすぎ (会場:リエコート武蔵小 杉リエトプラザ1) 協力:NPO法人小杉駅周 辺エリアマネジメント	2018年 1月17日(水)	約25組
3.	河原町保育園 協力:川崎市こども未来局 子育て推進部幸区保育総 合支援担当、運営管理課 河原町保育園	2018年 1月18日(木)	約150名
4.	新町しほかぜ保育園 協力:新町しほかぜ保育園	2018年 1月30日(火)	約150名

2)社会包摂事業の実施:『ファンタスティック・オーケストラ～ みんなで集えるコンサート～』の開催

a)オーケストラ・コンサートにおける鑑賞機会の拡大およびバ リアフリー化の取り組み

健全者と障がい者が共に鑑賞するコンサートを開催。2020年パラリンピックの競技開催を目指す川崎市と協力して、ゲストにパラリンピック選手の参加を依頼するなど、パラリンピックへの機運を高めていく。音楽を光や振動で感じられるような映像演出や、聴覚障がい者用鑑賞補助機材(体感音響システム)を使つての鑑賞など、普段鑑賞機会の少ない障がい者が、安心してコンサートを楽しめる取り組みを行う。音楽ホール、盲導犬協会や地域で活動するNPO団体等と連携し、障がいを持つ方でも負担なく楽しめるよう、バリアフリー化に取り組む。

b)福祉施設におけるVR(ヴァーチャル・リアリティ)を使った ワークショップ

障がい者福祉作業所、高齢者介護施設など、コンサート会場に出かけることが困難な方への、VR(ヴァーチャル・リアリティ)映像等を利用したオーケストラ体験と、東京交響楽団メンバーによるアンサンブルコンサートをあわせたワークショップを川崎市内の福祉施設にて実施。

VR映像を使うことにより、広い会場、大勢の人数による演奏など、音や広い空間に対する恐れや心配を取り除き、『みんなで集えるコンサート』やオーケストラへの興味関心の喚起と演奏会への導入を図る。

実施日

「東京交響楽団～みんなで集えるコンサート ミニ」

5.	白楊園(中原区)	2018年 2月1日(木)	約60名
6.	れいんぼう川崎(宮前区)	2018年 2月8日(木)	約60名
7.	KFJ多摩はなもも (多摩区)	2018年 2月8日(木)	約40名
8.	かわさき障害者福祉施設 たじま(川崎区)	2018年 2月12日(月)	約50名

社会包摂研究会の実施

有識者、川崎市、ミュージアム川崎シンフォニーホールと東京交響楽団事務局メンバーによる社会包摂研究会を開催。研究会では、クオリティ・オブ・ライフについて、調査方法の精査、分析を行っていく。

1)研究会名簿

有識者

- 片山泰輔(静岡文化芸術大学 文化政策学部 芸術文化学科 教授)
- 武濤京子(昭和音楽大学音楽学部 音楽芸術運営学科 教授)
- 大澤寅雄(NPO法人アートNPOリンク 理事/ニッセイ基礎研究所 主任研究員)
- 高田智幸(川崎市 市民文化局 市民文化振興室室長)
- 竹内淳(ミュージアム川崎シンフォニーホール 事業担当部長)
- 後藤大介(株式会社 アイディアシップ 代表取締役 コンサルタント/プランナー)
- 寒田亮(株式会社 アイディアシップ アナリスト/コンサルタント)

- 大野順二(東京交響楽団 専務理事 楽団長)
- 梶川純子(東京交響楽団 支援開拓本部 本部長)
- 長久保宏太郎(東京交響楽団 営業本部 課長)
- 桐原美砂(東京交響楽団 フランチャイズ事業本部 課長)
- 佐藤雄己(東京交響楽団 チケット販売本部)

2)実施日

- 第1回社会包摂研究会 2017年6月23日(金)
- 第2回社会包摂研究会 2017年9月8日(金)
- 第3回社会包摂研究会 2017年10月20日(金)
- 第4回社会包摂研究会 2018年1月16日(火)
- 第5回社会包摂研究会 2018年2月23日(金)

「新・文化芸術基本法」時代における フランチャイズ・オーケストラの意義

静岡文化芸術大学 文化政策学部 芸術文化学科教授 片山 泰輔

1. フランチャイズ・オーケストラとは何か

日本では近年、フランチャイズ・オーケストラという言葉がしばしば使われるようになってきている。英語のようにも見えるが、プロ野球の球団と本拠地球場の関係になぞらえた和製英語として捉えたほうが良いと思われる。内容的には英語圏で使われている resident orchestra に近いものを指していると推察される。

本拠地といっても、単に公演を継続的にやっているホールとの関係を指すのではない。東京では多くのオーケストラがサントリーホールで定期公演を行っているが、こうした関係がフランチャイズ・オーケストラと呼ばれることはあまりみられない。いつも同じホールを借りて公演を行っている、という関係を越えた「何か」があって、初めてフランチャイズ・オーケストラという言葉が使われることになる。

日本でこの言葉が初めて使われたのは、1989年に東京フィルハーモニー交響楽団が東急グループの民間文化施設である Bunkamura のオーチャードホールとの間でフランチャイズ提携を結んだ時だと言われている。しかし、フランチャイズ・オーケストラがより大きな注目を集めたのは、東京都墨田区と新日本フィルハーモニー交響楽団との関係であろう。

新日本フィルは、墨田区立のすみだトリフォニーホールが1997年に開館して以来、同ホールを拠点として活動しているが、フランチャイズ提携は「ホール」と結んでいるのではなく、ホールの設置者である墨田区という「地方自治体」と結んでいる点が先にみた東京フィルハーモニー交響楽団の場合とは異なっている。

墨田区は1988年に「墨田区音楽都市構想」を策定し、音楽都市づくりを推進する中で、新日本フィルハーモニーとの連携を深め、トリフォニーホール開館前から、同区内でのさまざまな活動を行ってきたという経緯がある。つまり、単にオーケストラがホールを拠点とするのではなく、教育やアウトリーチ等、地域

の文化政策推進におけるパートナーとしての位置づけがなされたのである。

2004年のミュージア川崎シンフォニーホールの開館を契機にスタートした、「音楽のまち・かわさき」と東京交響楽団との関係もこうした系譜にある。墨田区と川崎市のケースでは、コンサートの本番を行うだけでなく、日々の練習も本番と同じホールで行い、さらに楽団の事務所もホール内に置かれており、まさにホールに「住んでいるオーケストラ(resident orchestra)」となっている。

2. フランチャイズ・オーケストラによってもたらされるもの

単にオーケストラが特定のホールを借りて公演を継続し続けることと、自治体・ホールがオーケストラと包括的なフランチャイズ提携を行うことでは、何が異なってくるのであろうか。クラシック音楽の愛好家で、チケットを購入して定期演奏会を鑑賞しにくるだけの人にとっては、フランチャイズ・オーケストラであるかどうかはあまり意識されないかもしれない。

しかし、ホールに来て、まわりに少し注意を払えば、そのホールやその自治体におけるオーケストラのさまざまな活動の情報が目に入ってくることになる。コアな音楽ファンを対象とした定期演奏会とは異なる客層を対象とした名曲コンサートや教育プログラム、さらにはホールを離れて行うロビーコンサート等、オーケストラはそのホールや自治体を拠点に幅広い活動を行っている。

チラシやポスター等、一般の目にふれる活動以外にも、学校を訪問して行われる音楽教育プログラムや福祉施設でのアウトリーチ活動等、地域のさまざまな場で活動を行っている。フランチャイズ・オーケストラがない場合、もし地方自治体がこうした多様な活動を同レベルで実施しようとしたら、年度ごと、事業ごとに協力芸術家や団体を探さなければならず、かなりの手間暇がかかることになる。

ミュージア川崎シンフォニーホール(以下、ミュージア)では、ジュニア・プロデューサーという事業を実施している。市内の小学生がミュージアに集まり3ヶ月以上をかけてコンサートを企画し、実際に実施するという教育プログラムであるが、コンサートにはフランチャイズ・オーケストラである東京交響楽団メンバーが出演する。

ミュージアを拠点にするフランチャイズ・オーケストラであるので、企画段階から子どもたちに関わることが可能であるし、子どもたちにとっても、本番当日だけ来てくれる遠いところの音楽家ではなく、日々、ミュージアに通勤して、ホールを拠点に練習や公演を行っている地元の音楽家たちであることを実感しながら企画に取り組むことができる。さらに、ジュニア・プロデューサーの卒業生は、高校生までのメンバーで構成されるリトル・ミュージア

ザという企画チームをつくって、ミュージア川崎シンフォニーホールを拠点に、音楽の教育・普及をはじめとしたさまざまな活動を行っている。

これがフランチャイズ・オーケストラを持たない都市であったら、企画した公演等に出演する音楽家はその都度招聘しなければならない。もちろん、そのほうが毎回いろいろなアーティストが聴けて楽しい、という面もあるが、外から呼んでくる「輸入・消費」の事業と、ミュージアを拠点とする音楽家による「創造・発信」の事業では、子どもたちが「音楽のまち」を実感できる程度に大きな違いがある。リトル・ミュージアの活動を行っている中学生や高校生たちは、「音楽のまち・かわさき」を体で実感し、地域アイデンティティと誇りを強く持つようになってきている。

ジュニア・プロデューサーとリトル・ミュージア

ジュニア・プロデューサー

2013年から始動。川崎市内の小学4~6年の12名(公募・抽選)が、企画・広報・運営の3チームに分かれて東京交響楽団メンバーが登場するコンサートを作っていく。自ら考え行動することを促し、コンサートの内容をはじめ、チラシの作成から当日の運営まですべて自分たちで行う。これまでの経験者がサポーターとして入り、子ども同士での学び合いも促進していく。

リトル・ミュージア

ジュニア・プロデューサー経験者から構成された、高校生までの企画チーム。名前のとおり、ミュージアの小さなスタッフとして、ジュニア・プロデューサーへのサポート活動や、パブリック・プログラムの制作を行っている。





「新・文化芸術基本法」時代におけるフランチャイズ・オーケストラの意義

3. 公立文化施設の機能強化に向けて

日本では1980年代後半頃から地方自治体が豪華な文化施設を競って建設し、ハコモノ行政が批判されることも多かった。こうした中、2001年には文化芸術振興基本法が制定され、文化や芸術は、カネとヒマのある人々のための単なる教養・趣味・娯楽にとどまるものではなく、創造性の促進、他者理解を通じた共生社会の実現、地域アイデンティティの形成等、不特定多数の人々に利益をもたらす公益であることが明記されるとともに、文化や芸術を創造し享受することが人々の生まれながらの権利であるという「文化権」が規定された。

そして、2012年には劇場・音楽堂等の活性化に関する法律（通称：劇場法）が制定された。基本法の理念のもと、劇場・音楽堂等は、単なる愛好家のための趣味の場所ではなく、

「文化芸術を継承し、創造し、及び発信する場であり、人々が集い、人々に感動と希望をもたらす、人々の創造性を育み、人々が共に生きる絆を形成するための地域の文化拠点」

であるとされ、さらには、

「人々の共感と参加を得ることにより『新しい広場』として、地域コミュニティの創造と再生を通じて、地域の発展を支える機能も期待されている。また、劇場、音楽堂等は、国際化が進む中では、国際文化交流の円滑化を図り、国際社会の発展に寄与する『世界への窓』にもなることが望まれる」と記されている。

2017年6月に文化芸術振興基本法が改正され、名称が文化芸術基本法と改められるとともに、地方自治体に対しては、「地方文化芸術推進基本計画」の策定が努力義務とされた。すべての地方自治体は、公益であり人権である文化や芸術に関しての体系的な政策を計画的に実施するように努めなければならないのである。

これまで、日本の地方自治体が、文化政策のために最も多くの財政支出を投じてきたのが文化施設の建設である。巨額の

税金を投じて建設した施設が、公益の実現や住民の人権保障に効果的に寄与するように、施設の機能を強化することが急務となっている。

先述の劇場法では、その第5条に、

「実演芸術に関する活動を行う団体及び芸術家(以下「実演芸術団体等」という。)は、それぞれその実情を踏まえつつ、自主的かつ主体的に、実演芸術に関する活動の充実を図るとともに、劇場、音楽堂等の事業に協力し、実演芸術の水準の向上等に積極的な役割を果たすよう努めるものとする」

と規定されている。オーケストラをはじめとする実演芸術団体は劇場法においても、劇場・音楽堂等と協力して、さまざまな取り組みをすることが期待されているのである。

これまで公立文化施設は、「平等な利用」という原則を杓子定規に適用して、特定の芸術団体と連携することを躊躇してきた面もあった。しかし、フランチャイズ・オーケストラと連携し、優先的に施設を利用させることは、決して施設の設置目的を歪めることになるのではなく、市民の文化享受の平等化という文化権の保障や、不特定多数の人々に対するさまざまな公益という、より高次の文化政策の目的を達成するための手段となり得るのである。

ジュニア・プロデューサー活動の評価と子どもたちのQOL変化

ここでは、ジュニア・プロデューサー(8名)とリトル・ミュージアム(9名)(p.6下部の説明も参照)に対して実施したアンケート調査と補足インタビューについて、結果のサマリーを報告する。

■ジュニア・プロデューサー活動への評価

ジュニア・プロデューサー、(活動参加後1年以上を経た)リトル・ミュージアムとともに、ジュニア・プロデューサー活動への評価は高く、全員が、「さい高かった」もしくは「とても楽しかった」(8段階中のトップ2の選択肢)と回答している。補足インタビューで、「もしチャンスがあれば、またジュニア・プロデューサーになってみたいか」とたずねたところ、全員が「またやりたい」と回答した。

選 択 肢	ジュニア・プロデューサー	リトル・ミュージアム
さい高かった	4	7
とても楽しかった	4	2
けっこう楽しかった	-	-
どちらかといえば楽しかった	-	-
どちらかといえば楽しくなかった	-	-
あまり楽しくなかった	-	-
まったく楽しくなかった	-	-
さいあくだった	-	-

■活動を経験して変わったこと

ジュニア・プロデューサーでは、「何かに挑戦したくなった」や「新しいことに興味がわいた」、「何か新しいものを作りたくなった」といった創造性を刺激する効果が目立つ。また、活動を完遂できたことによって「自信がついた」との回答も目立っている。一方、活動を終了して間もないことも影響してか、「とくにかわったことはない」とする回答者も2名みられた。

リトル・ミュージアムでは、「音楽や楽器をやりたくなった」や「オーケストラに興味でた(強くなった)」といった音楽の関心喚起の効果が目立つ。なお、「とくにかわったことはない」との回答者はいないことから、活動から少し時間を経たことで、自分の中で「何かが変わった」と自覚(内省)する機会があったと推察される。

選 択 肢	ジュニア・プロデューサー	リトル・ミュージアム
毎日を楽しめるようになった	2	1
まわりの人にやさしくできるようになった	-	2
友だちや家そとと一緒に何かをしたくなった	2	-
新しいことに興味がわいた	4	4
オーケストラに興味でた(強くなった)	2	7
ゆっくり、じっくり考えるようになった	1	2
自信がついた	3	4
何かに挑戦したくなった	5	3
何か新しいものを作りたくなった	3	2
音楽や楽器をやりたくなった	2	8
その他*	-	1
とくにかわったことはない	2	-

*回答内容:「知らない人に声かけできるようになった!」

■活動参加者のQOL変化

ジュニア・プロデューサー活動に参加する前後でのQOL意識の変化をたずねたところ、ジュニア・プロデューサー、リトル・ミュージアムともに、「(気持ち)弱くなっている」との回答者はいなかった。特に、活動参加後に一定の時間が経過しているリトル・ミュージアムでは、5項目すべてにおいて9名中8名が「(気持ち)強くなった」とし、QOL意識の向上がみられた。

	強 なっている	く 変わらない	弱 なっている
いま住んでいるところ(かわさき市)が好きな気持ち	6	2	-
だれかのお手伝いができている／役にたっているという気持ち	6	2	-
かわさき市について、だれかに自慢したい気持ち	3	5	-
かわさき市では、音楽などの芸術が楽しめると感じる気持ち	5	2	-
ぜんたいとして、いまの生活は楽しいと感じる気持ち	4	4	-

※合計が「8」にならない箇所は無回答があるため

	強 なっている	く 変わらない	弱 なっている
いま住んでいるところ(かわさき市)が好きな気持ち	8	1	-
だれかのお手伝いができている／役にたっているという気持ち	8	1	-
かわさき市について、だれかに自慢したい気持ち	8	1	-
かわさき市では、音楽などの芸術が楽しめると感じる気持ち	8	1	-
ぜんたいとして、いまの生活は楽しいと感じる気持ち	8	1	-

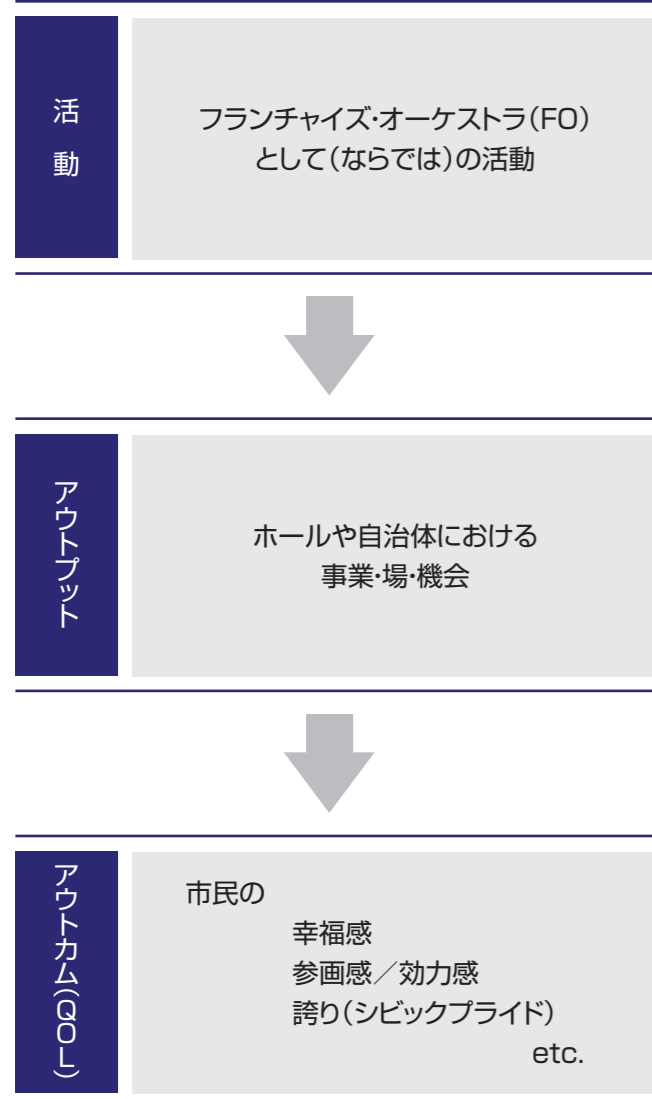
市民のQOLをいかに把握するか

～評価モデルと調査手法・調査票～

「フランチャイズ・オーケストラ(以下、FO)を持つことが、市民のクオリティ・オブ・ライフ(以下、QOL)を向上させ、豊かな社会を作る」という本事業の仮説を検証するため、研究会において評価のロジックモデルを検討。ロジックモデルに基づいて、調査を設計・実施した。

■評価のロジックモデル

GSG国内諮問委員会が発行している「社会的インパクト評価ツールver.2」を参考に、研究会において検討を加え、以下のようなロジックモデルを作成した。



●用語の定義(GSG国内諮問委員会「社会的インパクト評価ツールver.2」より)

活動	モノ・サービスを提供するために行う諸活動
アウトプット	事業活動によって変化・効果を生み出すために提供するモノ・サービス
アウトカム	事業や組織が生み出すことを目的としている変化・効果

※FOとして(ならでは)の活動が、ホールや自治体における事業・場・機会を生み出し、それによって市民のQOLが向上するというロジックモデルが成立するのを検証することとした。

■QOLをはかる指標と調査項目

研究会において、以下の5つのアウトカム(QOL)をはかる指標を設定した。

- 住んでいる地域への愛着
- 地域への帰属意識
- 地域への誇り
- 地域の文化芸術の充足感
- 生活への満足感

現時点でのQOLと、QOLの時系列変化の双方を把握できるよう、上記の5つの指標について、

「現在の評価」(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価)と、「10年前と比べた時の変化」(「向上している」、「さほど変わらない」、「低下している」の3段階評価)の2つの設問を作成してたずねた。

QOL指標のほか、性別、年代といったフェイス設問、普段の音楽の視聴状況、東京交響楽団の活動の認知/参加状況、今後期待する活動についてたずねる設計とした。(詳細についてはp.11～12の調査票を参照)

■調査・集計の対象

川崎市内での東京交響楽団が主催する演奏会等への参加者に加え、市内各地でのアウトリーチ活動の参加者、街頭歩行者、インターネットモニターに対する紙面とオンラインアンケート調査を実施することで、東京交響楽団との普段の関わりが、相対的に薄い回答者層も一定数確保できるよう配慮した。

集計対象は、QOL指標の一部に「現在住んでいる地域」に関する項目を採用したことから、現在川崎市に在住する回答者に絞ることとした。また、音楽への関与度をある程度揃える目的で、普段から音楽を視聴するとの条件で対象者を選定したところ、705件の有効回答を得た。

調査票の配布・回収場所(活動)	件数(件)
中原区役所コンサート	139
川崎市民アカデミー	72
東響ミニコンサート(ガレリア)	30
川崎定期演奏会第64回	74
名曲全集第132回	33
子育てサロンこすぎコンサート	36
プラネタリウムコンサート	31
パパママパークこすぎコンサート	38
河原町保育園コンサート(地域参加者)	40
上丸子小学校コンサート	49
新町しほかぜ保育園保護者(視聴はせず)	36
河原町保育園保護者(視聴はせず)	36
街頭	8
インターネットモニター	83
計	705

■主な検証の手法

主として、東京交響楽団の活動に自身が利用(参加)したことがある層と、利用(参加)したことがない層のQOL指標の得点(現在の評価:「そう思う」(2点)、「まあそう思う」(1点)、「どちらともいえない」(0点)、「あまりそう思わない」(-1点)、「そう思わない」(-2点)/10年前と比べた時の変化:「向上している」(1点)、「さほど変わらない」(0点)、「低下している」(-1点)としたときの平均得点)を比較し、統計的な有意差の有無を確認することで、東京交響楽団の事業・場・機会の提供が、市内在住者のQOLとその向上に与える効果を検証した。

また、一部の集計では、高校生以下の子どもを持つ回答者を「子育て層」、子どもを持たないか、大学生以上の子供のみを持つ65歳以上の回答者を「65歳以上層」とし、比較分析軸として採用した。その他、フェイス設問である居住地や世帯年収についても分析軸として活用し、平均得点の統計的な有意差の有無を確認した。

■調査票

以下のような調査票を配布し、回答してもらった。(紙調査票とは別に、オンラインアンケート調査用の画面、インターネットモニター専用調査画面も活用した。)

平成 29 年度戦略的芸術文化創造推進事業
「ファンタスティック・オーケストラを中心とした市民のクオリティ・オブ・ライフの調査と向上のための事業」

普段の音楽視聴や生活についてのお伺い

本日はご来場いただきまして、誠にありがとうございます。
東京交響楽団では、今後の活動の企画のために、皆さまの普段の音楽視聴や生活に関する簡単なアンケート調査を実施しております。ご回答いただいた内容は統計的に集計いたしますので、ご回答者個人が特定された形で公表されることはありません。
たいへんお手数ですが、下記の質問にお答えいただき、お帰りの際に回収箱へご投函くださいますようお願いいたします。

アンケートにご回答いただいた方の中から抽選で 5 組 10 名さまを、東京交響楽団のコンサートにご招待いたします。当せんはチケットの発送をもって代えさせていただきます。

あなた自身のことについてお伺いします。

問1. 以下の点について、当てはまるものに○をつけ、ご記入ください。

■ 居住地

- 川崎市 (川崎 / 幸 / 中原 / 高津 / 宮前 / 多摩 / 麻生) 区
- 横浜市 () 区
- その他の神奈川県 () 市・区・町・村
- 東京都 () 市・区・町・村
- その他 () 道・府・県 () 市・区・町・村

■ 上記への居住年数 約 () 年 / 1年未満 () か月

問2. あなたは普段、どのような形で音楽と関わっていますか。以下の中から、当てはまるものをすべてに○をつけてください。

1. 屋内コンサート会場での鑑賞 (コンサートホール、ライブハウス など)	6. ご自身の楽器演奏 (演奏している楽器:)
2. 野外コンサート会場での鑑賞 (スタジアム、野外音楽フェス会場 など)	7. その他 (具体的に:)
3. テレビやラジオ番組での視聴	8. 音楽はあまり鑑賞・視聴しないが、 音楽以外の文化・芸術活動には関わっている
4. CD や DVD などを購入/レンタルして鑑賞 (オンラインでの購入やダウンロードも含む)	9. 音楽はあまり鑑賞・視聴しないし、 音楽以外の文化・芸術活動にも関わっていない
5. インターネット動画サイトでの鑑賞	

1

p.1
問1:現在の居住地と居住年数
問2:普段の音楽との関わり
※集計では、問2の8-9の回答者を除外

問3. 現在の生活の以下のような点について、あなたはどのように感じていますか。5段階のうち、それぞれについてもっとも当てはまるものに○をつけてください。

	そう思う	まあ そう思う	どちらとも いえない	あまり そう思わない	そう 思わない
住んでいる地域に愛着を感じている	1	2	3	4	5
住んでいる地域の一員だと感じる	1	2	3	4	5
住んでいる地域について話かき話したい	1	2	3	4	5
地元で文化・芸術が楽しめる	1	2	3	4	5
全体として、現在の生活に満足している	1	2	3	4	5

問4. 問3であなたがいい点は、10年前と比べるとどうなっていますか。3段階のうち、それぞれについてもっとも当てはまるものに○をつけてください。

	向上 している	さほど 変わらない	低下 している
住んでいる地域に愛着を感じる気持ち	1	2	3
住んでいる地域の一員だという実感	1	2	3
住んでいる地域について話かき話したい気持ち	1	2	3
地元で文化・芸術が楽しめやすい印象	1	2	3
全体としての、生活への満足感	1	2	3

次に、オーケストラの活動についてお伺いします。

問5. 以下の東京交響楽団 (川崎市を拠点に活動するオーケストラ) に関する取り組みのうち、1. あなたが知っているもの、2. 自身が利用したことがあるもの、3. 家族が利用したことがあるもの、4. 今後(も)参加したいもの、5. 応援したいものについて、それぞれすべてにチェック (✓) してください。
→ 右側のページに続いています。

	1	2	3	4	5
	知って いる	自身が 利用した ことがある	家族が 利用した ことがある	今後 (も) 参加 したい	応援 したい
①「ミュウザ川崎」における各種演奏会/ミニコンサート 【東京交響楽団による「川崎定期演奏会」】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
【名曲全集、映画音楽、モーツァルト・マニエ、ミュージカル、サマーミュージック、ライブ・コンサートなど東京交響楽団が出演する演奏会】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
【音楽が中心、ランチタイムコンサート、ミュージカルコンサートなど東京交響楽団メンバーによる小編成の演奏会】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

2

p.2
問3:現在のQOL評価
問4:10年のQOL変化
※5つの指標でそれぞれを評価

	1	2	3	4	5
	知って いる	自身が 利用した ことがある	家族が 利用した ことがある	今後 (も) 参加 したい	応援 したい
②キッズプログラム (0才からのオーケストラ) 【0歳から入場可能な東京交響楽団の演奏会、ズーランドアラスと共演】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
③新百合ヶ丘など川崎市内の他のホールでの演奏会 【アルディカメッパの芸術祭、サマーミュージカル出演公演などでの東京交響楽団の演奏会】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
④川崎市内の小中学校音楽鑑賞教室 【市内の小・中・高生をミュウザ川崎に招待して行うオーケストラ鑑賞会】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
⑤音楽講座や楽器体験プログラム 【ミュージックでわかる!市民アカデミー「リキサン・エンジョイミュージック」等の、東京交響楽団メンバーによる小編成の演奏会と音楽講座、公開リハーサルを鑑賞できる機会も提供している】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
⑥川崎市内の区役所での演奏会 【川崎区民ホール、川崎区民センターなど、オーケストラによる東京交響楽団メンバーによる小編成の演奏会】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
⑦川崎市内のアナタリズムでのコンサート 【川崎市「まちづくり科学館」での、星空観望会などのメンバーによる小編成の演奏会】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
⑧福祉施設、病院、学校など川崎市内各所でのミニコンサート 【市内福祉施設 (療養施設・障がい者施設・高齢者介護施設 etc.) にて行われる川崎市巡回公演や、0才からのオーケストラや、特別支援学校・平和館など市内施設でのメンバーによる小編成の演奏会】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
⑨小学生がコンサートの企画・運営に参加する「ジュニアプロデューサー」 【市内小学生公開による、東京交響楽団メンバーの演奏会をプロデュースするプログラム (主催:ミュウザ川崎)】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
⑩ボランティアメンバーによるコンサート準備・当日運営のサポート 【公開ボランティア、東京交響楽団演奏会にて公演当日の準備・運営をサポート】	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
⑪その他 (具体的に:)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

→ 裏面に続きます。

3

p.2(下部)-3
問5:東京交響楽団の活動の認知状況、自身/家族の参加状況、今後の参加/応援意向
※説明文の活動の写真を添えて想いを助成

問6. 現在お住まいの地域 (市区町村) を拠点として活動するオーケストラに、あなたはどのような活動を期待しますか。「問5」の活動①~⑩の中から、期待する順に3つまで、活動の希望をお書きください。
※ 現在お住まいの地域を拠点として活動するオーケストラがない場合は、もしあったとしたら、を想定してお答えください。

最も期待する活動 2番目に期待する活動 3番目に期待する活動

問7. その他、「地域を拠点とするオーケストラ」に期待する活動があれば、自由にお書きください。

問8. 以下の点について、当てはまるものに○をつけ、ご記入ください。

■ 性別 1. 男性 2. 女性 3. 答えにくい/答えられない

■ 年代 1. 10代 2. 20代 3. 30代 4. 40代 5. 50代
6. 60~64歳 7. 65~69歳 8. 70~74歳 9. 75歳以上

■ お子様の有無 1. 乳幼児 2. 小学生 3. 中学生 4. 高校生 5. 大学生以上
6. 子どもはいない

■ 職業 1. 学生 2. 会社員 3. 会社役員 4. 学校・病院・公共団体職員
5. 学校・病院・公共団体役員 6. 自営業 7. パート/アルバイト
8. 専業主婦 (主夫) 9. 求職中 10. すでに引退
11. その他 ()

■ 世帯年収 1. 400万円未満 2. 400万円以上600万円未満 3. 600万円以上1,000万円未満
4. 1,000万円以上

お答えいただいた方の中から抽選で 5 組 10 名さまを、「東京交響楽団 ファンタスティック・オーケストラへみんなで作るコンサートへ」(2018年3月7日16時開演 ミュウザ川崎シンフォニーホール) にご招待いたします。プレゼントの送付先をご記入ください。

■ お名前: _____

■ ご住所: 〒 _____

※いただいた個人情報は、本事業の研究およびアンケートのプレゼントを送付する目的のみに使用いたします。

アンケートは以上です。ご協力いただき誠にありがとうございました。

公益財団法人 東京交響楽団

4

p.4
問6:FOに期待する活動(TOP3)
問7:その他,FOに期待する活動(自由記述)
問8:フェイス設問(性別、年代、子どもの有無、職業、世帯年収)

フランチャイズ・オーケストラの課題と展望

～オーケストラとクオリティ・オブ・ライフ～

NPO法人アートNPOリンク 理事 大澤 寅雄

1. 「クオリティ・オブ・ライフ」とは何か

クオリティ・オブ・ライフ(Quality of Life、以下「QOL」という。)という言葉をご存知だろうか。インターネットで検索すると、以下のような説明がある。

《「人生の質」または「生活の質」と訳す》広義には、恵まれた環境で仕事や生活を楽しむ豊かな人生をいう。狭義には、特に医療・福祉分野で、延命治療のみにかたよらずに、患者の生活を向上させることで、患者の人間性や主体性を取り戻そうという考え方。QOL。(デジタル大辞泉より)

上記の説明の通り、QOLは元来、医療や福祉の分野での考え方である。なぜそれがオーケストラと関係するのだろうか。近年、文化芸術と社会との関わり方は変化しており、何のために文化芸術が必要なかが問われることが少なくない。以前は「モノの豊かさから、心の豊かさの実現のため」という言葉で語られてきた文化芸術の振興の根拠が、現在では説得力を失ってきたのだ。文化芸術は、果たして心の豊かさの実現に結びついているのだろうか。文化芸術に市民の税金を投入するならば、あまねく市民の心の豊かさの実現に貢献すべきなのではないか。そうした問いに向き合うために、従来は抽象的で曖昧な言葉だった「心の豊かさ」を、個人の生活や社会活動の状態を把握し、指標化し、評価を行う必要性が生まれた。それが文化芸術にQOLという考え方を導入する理由であり、川崎市とフランチャイズ提携を結ぶ東京交響楽団が、QOLに向き合う理由でもある。

しかし、QOLの指標化や評価と言っても、医療や福祉と同じ考え方や評価指標を文化芸術に移入することが必ずしも適切とは言えないだろう。健康や疾患の状態は直接的に文化芸術によって変えられるものではないからだ。それでは、「恵まれ

た環境で仕事や生活を楽しむ豊かな人生」に文化芸術が関与できるのは、どのような状態だろうか。本調査研究では、とくに「フランチャイズ・オーケストラ」と市民のQOLの関わりを把握するため、「住んでいる地域への愛着」、「地域への帰属意識」、「地域への誇り」、「地域の文化芸術の充足感」、「生活への満足感」という5項目をQOLの指標とした。なお、今回の調査研究での5項目が普遍的な指標だと考えているわけではない。このQOLの指標化の検討自体が、市民にとってのフランチャイズ・オーケストラの役割を考える重要な作業であり、今後も引き続き議論しながら見直しや更新が必要だと考えている。

2. 何がQOLの違いを生むのか

こうして指標化したものをアンケート調査によって把握し、その集計結果は別途記載されているとおりだが、ここでは筆者が調査研究委員として特に着目した点を述べておく。

まず、調査対象は川崎市民だが、東京交響楽団との関係の有無、あるいは関係の密度が似通っているのは、幅広い市民のQOLを把握することにはならない。そのため、定期演奏会など特定のコンサートの来場者だけではなく、市内各地でのアウトリーチ活動の参加者、街頭アンケートやインターネット調査によるコンサートの非来場者も、同じ内容で調査対象としていることを確認しておきたい。

回答者のQOLを居住地別に分析した。ミュージアム川崎シンフォニーホールが所在する川崎駅周辺エリア(川崎区・幸区)、川崎駅と鉄道でつながっているJR南武線沿線エリア(中原区・高津区・多摩区)、そして川崎駅に鉄道で直結していない私鉄沿線エリア(宮前区・麻生区)に分けて見ると、個別の地域で個別のQOLの指標による高低はあるものの、突出して高い地域、低い地域は見られず、明確な有意差のある結果は少なかった。

次に回答者のライフステージに着目し、いわゆる「高齢者層」(65歳以上の回答者)と「子育て層」(高校生以下の子どもが

いる回答者)のQOLを比較すると、有意性が認められた回答結果としては、高齢者層が子育て層よりも、地域の帰属意識や地域の文化芸術の充足感が高い結果となった。一方で、10年前とQOLを比較した場合、生活への満足度が向上したという回答は、高齢者層よりも子育て層の方が高かった。

続けて世帯収入とQOLの関係に目を向けると、有意性のある結果も明確な相関関係もほとんど見られなかった。これは筆者自身も意外に感じたのだが、世帯収入が多いことが、QOLの指標が高いわけではなかったのだ。例えば「全体として、現在の生活に満足している」という項目に、「そう思う」から「そう思わない」までの5段階評価(+2点～-2点)の平均値を世帯年収の区別に見ると、400万円未満が1,000万円以上よりも高く、そこには有意性も認められなかったのである。

調査結果の中でQOLの違いに特徴的な有意性があったのが、東京交響楽団が提供する公演やアウトリーチを含めた活動を利用(参加)したことがあるか、ないか、という区別だった。有意性が認められる結果として、「住んでいる地域に愛着を感じている」、「住んでいる地域の一員だと感じる」、「地元で文化・芸術が楽しめる」、「全体として、現在の生活に満足している」の4項目で、東京交響楽団の活動利用が、非利用者の平均を上回っており、また、10年前と比較して、地元では文化・芸術が豊かだという印象が向上しているという回答も、活動利用者が非利用者の平均を上回っていた。

以上の結果から言えることは、川崎市民のQOLは、在住地やライフステージによって、細分化したQOLの高低の違いはあるが、世帯収入とQOLにはほとんど相関関係が認められず、最も相関関係の有意性があったのは、東京交響楽団の活動の利用と非利用の違いだったということだ。また、東京交響楽団の活動を利用する市民の世帯収入が高いわけではなく、経済的なゆとりとQOLとの間にも相関関係はない、ということが分かったのである。

3. オーケストラとQOL

社会全体を見渡せば、オーケストラに関心のある人よりも関心の薄い人の方が圧倒的に多い。もしかしたら「どうせオーケストラなんて、お金持ちの趣味や娯楽だ。一般の市民にとって必要はない」というイメージを持っている人は、少なくないのかもしれない。これまで筆者は、そうした意見にどう答えることができるだろうか、ということも、長い間考えてきた。

平成28年度に東京交響楽団が実施した「東京交響楽団のコンサート来場者向けアンケート調査およびインターネット調査結果(概要)」によると、「一般・オーケストラ音楽に興味あり層」と、「オーケストラファン層」を比較すると、「ファン層」は「興味あり層」よりも最終学歴が高く、年収も高い結果となっている。この結果は「オーケストラなんて、お金持ちの趣味や娯楽だ」というイメージを、ある程度裏付けていると言える。

しかし、東京交響楽団はフランチャイズ・オーケストラとして、ミュージアム川崎シンフォニーホールでのコンサートだけでなく、市内の公共施設、学校、福祉施設などでのアウトリーチ活動やコミュニティプログラムを継続的に実施し、オーケストラへの興味や関心、また、学歴や年収に関わらず、市民と東京交響楽団が触れ合う機会をつくってきた。その上で今回の調査結果が示していることは、東京交響楽団の活動と何らかの関わりを持つ層は、関わりを持っていない層に比べて高いQOLを示しており、経済的なゆとりとQOLの関係よりも、オーケストラとQOLの関係の方が、有意性があるということだ。

今回の調査結果から「どうせオーケストラなんて、お金持ちの趣味や娯楽だ。一般の市民にとって必要はない」という見方に対して、今後、筆者はこのように答えることにしよう。東京交響楽団というオーケストラでは、ホールでチケット代を払って聞きに来る人を相手にコンサートをするだけでなく、地域に開かれ、市民から親しまれるオーケストラとして、関心の有無や経済的な状況に関わらず、市民と関わっていく活動をしてい



フランチャイズ・オーケストラの課題と展望 ～オーケストラとクオリティ・オブ・ライフ～

る。そのことで、東京交響楽団は市民のクオリティ・オブ・ライフ（＝恵まれた環境で仕事や生活を楽しむ豊かな人生）の向上に貢献すべく、川崎市においてたゆまぬ努力を続けているのである。それを大きな目で見れば、あるいは突き詰めて言えば、「オーケストラの民主化」と言ってもいいのではないだろうか。

4. 川崎市民としての東京交響楽団と川崎市が目指すこと

川崎市では、川崎市自治基本条例において、「市民」を「本市の区域内に住所を有する人、本市の区域内で働き、若しくは学ぶ人又は本市の区域内において事業活動その他の活動を行う人若しくは団体」と定義しており、さらに条例の逐次説明書で次のように解説している。

「市民」とは、地方自治法に定める「住民」（市内に住所を有する人で、外国人市民の方や法人を含みます。）のほか、市内の事業所に勤務している人や市内の学校に通学している人、市内で市民活動や事業活動など、さまざまな活動を行っている個人や団体をいいます。このように、市民の範囲を広げて定義しているのは、本格的な少子高齢社会の到来、地球環境への配慮、また行政需要の多様化、政策課題の広域化などの状況の中で、地域社会が抱える課題の解決やまちづくりを進めていくためには、いわゆる「住民」だけでなく、川崎という地域社会における幅広い人々が力を合わせていくことが必要であるとの認識に基づくものです。

条例でこのような認識のもとに「市民」を定義づけていることは、川崎市にとって、そして川崎市とフランチャイズ提携を結んでいる東京交響楽団にとって、二重の意味がある。一つの意味は、東京交響楽団が関わっていく「市民」とは、行政区域内に住民票を置く「住民」だけでなく、行政区域外から域内に通勤や

通学をする人々、市内でさまざまな活動を行う人も市民として捉えなければならないということだ。そしてもう一つの意味は、東京交響楽団とその楽団員や事務局も、川崎市内で、川崎市民のための活動を行うという意味で「市民」であるということだ。

川崎市民としての東京交響楽団の今後の挑戦は、今回の調査結果を、市民にとってより手応えのある形で実証し、可視化させていくことだ。そして「音楽のまち・かわさき」を標榜している川崎市と東京交響楽団が、共に力を合わせて市民のQOLを高め、市民が愛着と誇りを持てるまちづくりを進め、「市民の自治」と「オーケストラの民主化」を進めていく。それが、フランチャイズ提携を結ぶ両者の目指すべき方向なのではないだろうか。

東京交響楽団の活動と川崎市民のQOL

～調査結果サマリー①～

ここでは、結果サマリー①として、東京交響楽団の活動と川崎市民のQOLの関係がどうなっているかに着目した分析を報告する。

■4つの分析軸

川崎市民のQOLがどのような要素と相関関係にあるのかをみるため、以下の4つの分析軸を設定して集計を行った。（それぞれの内訳は円グラフを参照）

①居住地域

分析に際しては、東京交響楽団の活動拠点である「ミュージア川崎シンフォニーホール」からの距離や往来できる鉄道路線を念頭に、川崎駅周辺エリア（川崎区、幸区）、JR南武線沿線エリア（中原区、高津区、多摩区）、私鉄沿線エリア（宮前区、麻生区）の3つのエリアに分類し、検証した。

②ライフステージ

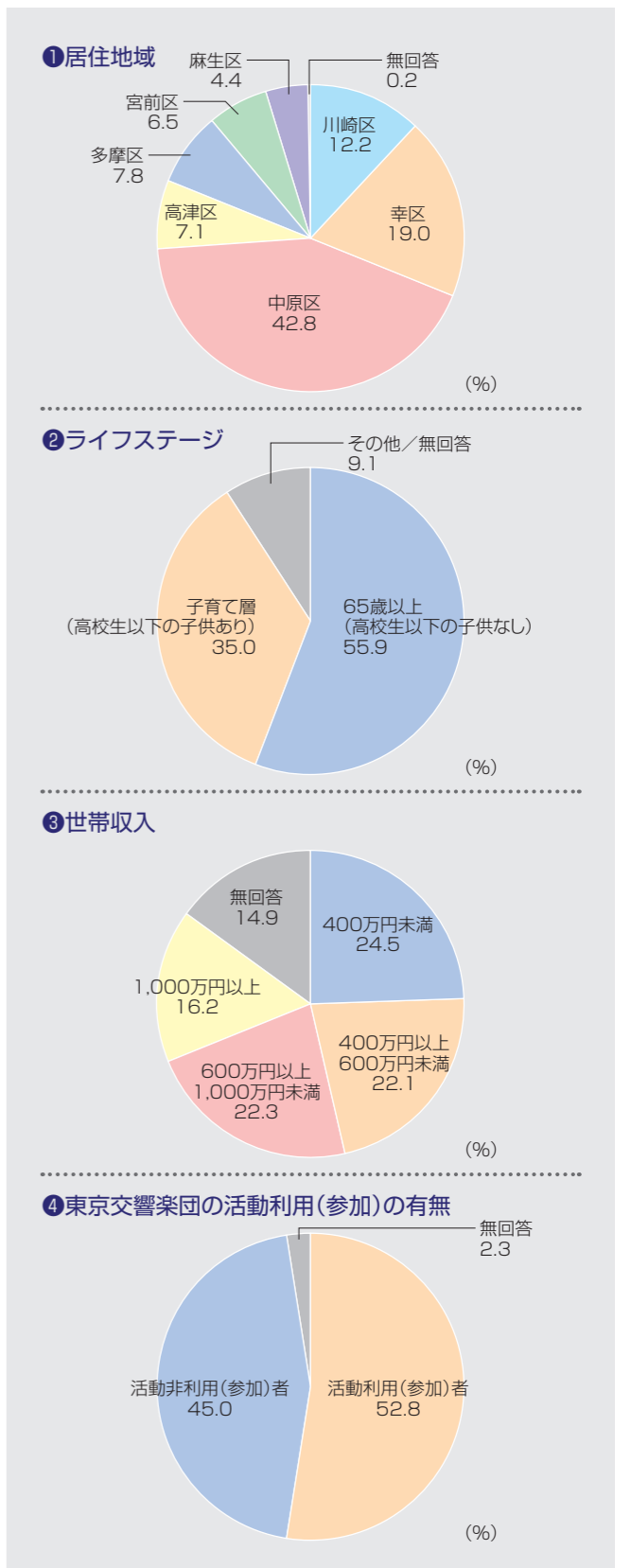
高齢者層（65歳以上かつ、子どもがいないか大学生以上）と子育て層（高校生以下の子どもを持つ回答者）に分類し、ライフステージによるQOLの差の有無を検証した。

③世帯収入

世帯収入の高低と、QOLの関係について検証した。

④東京交響楽団の活動利用（参加）の有無

東京交響楽団が川崎市で事業活動を行うことで、市民には利用（参加）の場が提供される。その利用（参加）者と非利用（参加）者のQOLの違いをみることで、東京交響楽団の活動がQOLに与える効果について検証した。



■各分析軸とQOLの関係

前ページの4つの分析軸の各項目と、5つのQOL指標(p.11 調査票の問3、問4)の関係について検証するため、各設問の選択肢に次のような配点をした。

①「現在のQOL」(調査票「問3」)

「そう思う」(2点)、「まあそう思う」(1点)、「どちらともいえない」(0点)、「あまりそう思わない」(-1点)、「そう思わない」(-2点)と配点した。

②「QOLの変化」(調査票「問4」)

「向上している」(1点)、「さほど変わらない」(0点)、「低下している」(-1点)と配点した。

下の8つの数表では、選択肢ごとの回答比率(%)と配点を掛け合わせて算出した平均得点について一覧表示するとともに、全回答者や分析軸内の他の比較項目との統計的有意差の有無を色付けで示している*。

有無を色付けで示している*。

10年前と比べた「QOLの変化」では、指標によってはライフステージや世帯年収の影響がみられた。一方、「現在のQOL」には、東京交響楽団の活動の利用(参加)が、「生活への満足度」も含めた多くのQOL指標と強い関係にあることが示された。東京交響楽団が利用(参加)の場や機会を提供することが、川崎市民のQOL向上をもたらしている可能性が示唆されている。

*平均得点と標準偏差、属性の回答者数(n値)を用いた「t検定」を行っている。

●居住地域別の「現在のQOL」比較

(平均値)

	n	住んでいる地域への愛着	地域への意識	地域への誇り	地域文化芸術の充実感	生活への満足度
全体	705	1.35	1.06	0.56	0.87	1.24
川崎 / 幸	220	1.27	0.94	0.41	0.91	1.19
宮前 / 麻生	77	1.22	0.93	0.32	0.72	1.23
中原 / 高津 / 多摩	407	1.41	1.14	0.68	0.87	1.26

●居住地域別の「QOLの変化」比較

(平均値)

	n	住んでいる地域への愛着	地域への意識	地域への誇り	地域文化芸術の充実感	生活への満足度
全体	705	0.51	0.43	0.30	0.47	0.51
川崎 / 幸	220	0.50	0.40	0.25	0.54	0.46
宮前 / 麻生	77	0.40	0.30	0.17	0.39	0.47
中原 / 高津 / 多摩	407	0.54	0.47	0.35	0.45	0.54

■全体の値と比較して有意に低い ■全体の値と比較して有意に高い

●ライフステージ別の「現在のQOL」比較

(平均値)

	n	住んでいる地域への愛着	地域への意識	地域への誇り	地域文化芸術の充実感	生活への満足度
全体	705	1.35	1.06	0.56	0.87	1.24
65歳以上(高校生以下の子どもなし)	394	1.36	1.09	0.52	0.93	1.26
子育て層(高校生以下の子どもあり)	247	1.26	0.91	0.54	0.65	1.14

●ライフステージ別の「QOLの変化」比較

(平均値)

	n	住んでいる地域への愛着	地域への意識	地域への誇り	地域文化芸術の充実感	生活への満足度
全体	705	0.51	0.43	0.30	0.47	0.51
65歳以上(高校生以下の子どもなし)	394	0.48	0.37	0.24	0.46	0.45
子育て層(高校生以下の子どもあり)	247	0.53	0.49	0.36	0.46	0.55

■他方の項目の値と比較して有意に高い

●世帯年収別の「現在のQOL」比較

(平均値)

	n	住んでいる地域への愛着	地域への意識	地域への誇り	地域文化芸術の充実感	生活への満足度
全体	705	1.35	1.06	0.56	0.87	1.24
400万円未満	173	1.40	1.12	0.55	0.89	1.31
400万円以上600万円未満	156	1.40	1.17	0.58	0.93	1.21
600万円以上1,000万円未満	157	1.20	0.88	0.49	0.73	1.19
1,000万円以上	114	1.39	1.02	0.66	0.85	1.24

●世帯年収別の「QOLの変化」比較

(平均値)

	n	住んでいる地域への愛着	地域への意識	地域への誇り	地域文化芸術の充実感	生活への満足度
全体	705	0.51	0.43	0.30	0.47	0.51
400万円未満	173	0.43	0.40	0.23	0.40	0.46
400万円以上600万円未満	156	0.53	0.40	0.23	0.52	0.48
600万円以上1,000万円未満	157	0.47	0.39	0.31	0.51	0.47
1,000万円以上	114	0.57	0.54	0.40	0.48	0.59

■全体の値と比較して有意に低い ■全体の値と比較して有意に高い

●東京交響楽団の活動への参加有無別の「現在のQOL」比較

(平均値)

	n	住んでいる地域への愛着	地域への意識	地域への誇り	地域文化芸術の充実感	生活への満足度
全体	705	1.35	1.06	0.56	0.87	1.24
活動利用(参加)者	372	1.44	1.19	0.62	1.13	1.31
活動非利用(参加)者	317	1.24	0.91	0.49	0.56	1.14

●東京交響楽団の活動への参加有無別の「QOLの変化」比較

(平均値)

	n	住んでいる地域への愛着	地域への意識	地域への誇り	地域文化芸術の充実感	生活への満足度
全体	705	0.51	0.43	0.30	0.47	0.51
活動利用(参加)者	372	0.55	0.44	0.28	0.54	0.51
活動非利用(参加)者	317	0.47	0.42	0.32	0.39	0.50

■他方の項目の値と比較して有意に高い

フランチャイズ・オーケストラが より市民に役立つ存在になるために ～調査結果サマリー②～

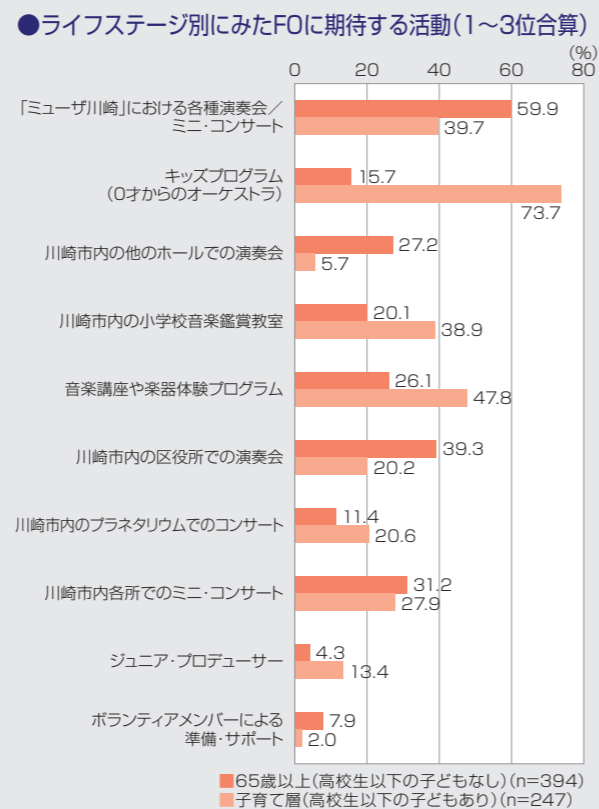
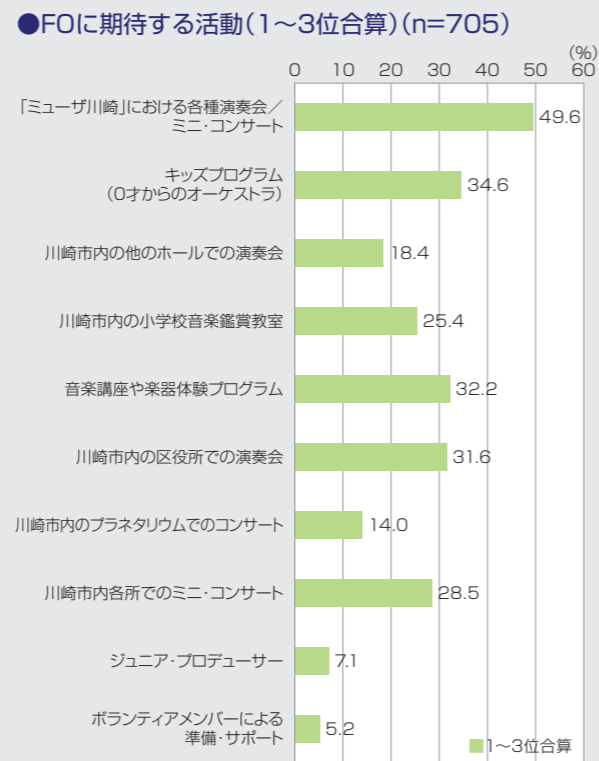
続いて、調査結果から、市民がFO(現在住んでいる市区町村を拠点として活動するオーケストラ)に期待する活動について報告する。

■期待値の高い既存活動

調査票問6において、東京交響楽団が現在行っている活動のうち、期待度の高いものから3つまでをたずねた。

上位1～3位の合算(1～3位のいずれか1つとして選ばれた割合)のグラフをみると、「『ミュージア川崎』における各種演奏会/ミニ・コンサート」への期待が最も大きく、49.6%。約半数が、活動拠点での演奏会に期待している。次いで、「キッズプログラム(0才からのオーケストラ)」、「音楽講座や楽器体験プログラム」(32.2%)、「川崎市内の区役所での演奏会」(31.6%)が僅差で続いている。5番目に多い「川崎市内各所でのミニ・コンサート」(28.5%)とも併せて考えると、教育的な要素や、近場で気軽に参加できることへのニーズも強いことがみてとれる。

ライフステージ別に期待する活動を見てみると、期待する活動に差が表れる。65歳以上(高校生以下の子どもなし)の層では、「『ミュージア川崎』における各種演奏会/ミニ・コンサート」(59.9%)、「川崎市内の区役所での演奏会」(39.3%)がトップ2の活動であるのに対して、子育て層(高校生以下の子どもあり)の層では、「キッズプログラム(0才からのオーケストラ)」(73.7%)への期待が圧倒的に高く、「音楽講座や楽器体験プログラム」(47.8%)、「川崎市内の小学校音楽鑑賞教室」(38.9%)といった子どもの教育に関わる活動も支持されている。「川崎市内各所でのミニ・コンサート」については、ライフステージに関わらず、近場で気軽に参加できる機会として、ニーズが高いことが見てとれる。

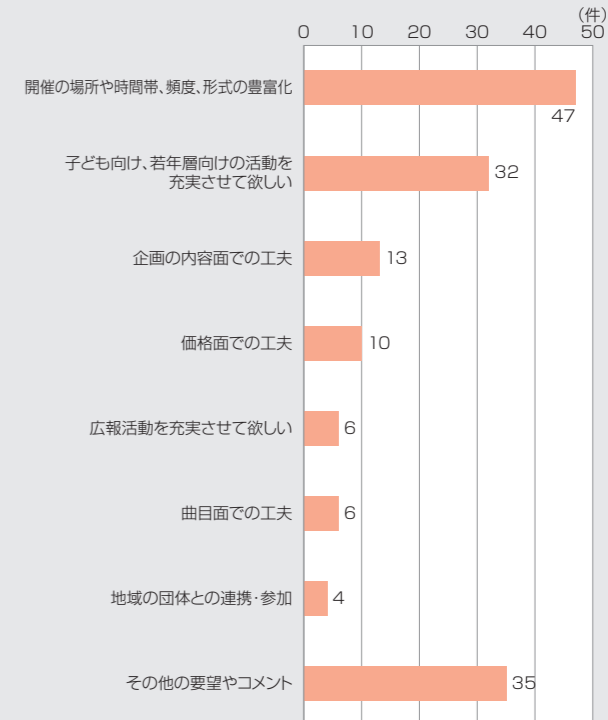


■自由回答にみるFOへの期待

既存の活動以外でFOに期待するものを、自由記述形式でたずねている(調査票問7)。回答者705名中149名が寄せた回答内容を分類してみると、開催の場所や時間帯、頻度、形式を工夫して欲しいとのニーズが最も多く、47件あった。また、前問(問6)で子育て層を中心にニーズの高かった子ども向け、若年層向けの活動の充実についても、32件の要望が寄せられている。その他、曲目紹介など、参加する活動の内容面への期待(13件)、より手軽に参加できる価格面への期待(10件)などが寄せられている。

地域を拠点に活動するオーケストラには、さまざまなライフステージにある市民の生活実態(生活エリア、時間帯、子どもと行動する必要がある、など)に寄り添ったプログラムを提供していくことで、市民の参加機会を増やし、QOLの向上に継続的に貢献していくことが求められていると考えられる。

●その他、FOに期待すること(自由記述内容を複数回答形式に分類)



●自由回答(抜粋)

◆開催の場所や時間帯、頻度、形式の豊富化

- コンサートホールに向かうのは敷居が高いと感じている。身近な市民ホール等での少人数、小編成でのミニコンサート等気軽に参加できるプログラムを期待したい。(65～69歳。43年在住)
- 区役所コンサートを毎月開催してほしいです(75歳以上。35年在住)
- コンサートを土日や平日の夜、平日の夕方にやってほしい。通常平日昼間は仕事があるので、もう少し小規模でもいいので。(40代。3年在住)

◆子供向け、若年層向けの活動を充実させて欲しい

- 0歳からのオーケストラの存在をアンケートで知った。ぜひ参加してみたい。(30代。5年在住)
- 子供達が音楽や楽器に接する機会を多く作ってほしい。(40代。8年在住)
- 特に若い世代に関心を持ってもらえるような活動(65～69歳。31年在住)

◆企画の内容面での工夫

- 観客も一緒に合唱で参加できるとよい。(60～64歳。37年在住)
- 曲目解説などは文字だけでなくトークで説明してくれるとありがたい(75歳以上。50年在住)

◆価格面での工夫

- もっと安く演奏を聴きたい。今はミュージアのランチタイムコンサートに500円払うのが精いっぱい。(65～69歳。23年在住)
- 予約なしでも参加できる無料コンサートはありがたい(30代。4年在住)

◆広報活動を充実させて欲しい

- プロモーションにwebやメールを活用(30代。3年在住)
- 一般市民が気軽に鑑賞できる様に広報活動を充実してもらいたい(70～74歳。60年在住)

◆曲目面での工夫

- 映画音楽を多く(回数)希望(65～69歳。67年在住)
- 毎年12月に必ずミュージアで第九を演奏してほしい(20代。2年在住)

◆地域の団体との連携・参加

- ①チャリティーコンサート、②地域合唱団との合同コンサート、③地域楽団(小学生～高校生)との合同コンサート、④楽器の教室(出前授業など)(65～69歳。30年在住)
- 東京交響楽団とコーラスで歌いたい(60～64歳。19年在住)

フランチャイズ・オーケストラと市民

昭和音楽大学 音楽学部 音楽芸術運営学科教授 武 濤 京 子

1.はじめに

東京交響楽団は2002年に川崎市とフランチャイズ契約を締結した。2004年にミューザ川崎シンフォニーホールがオープンした後は「音楽のまち・かわさき」というキャッチフレーズとともに、市内でさまざまな活動を行ってきた。そのような活動の歴史や実績を背景に、「フランチャイズ・オーケストラ」と市民の「クオリティ・オブ・ライフ」の関係性を明らかにしていこう、というのがこのプロジェクトの趣旨である。

本稿では、今回の事業で実施した調査から、「ジュニア・プロデューサー／リトル・ミューザへの調査」と「市民の声」に焦点をあて、そこで示されるキーワードやエピソードをもとに、フランチャイズ・オーケストラと市民の関係性について考察を行う。

2.ジュニア・プロデューサー／リトル・ミューザに参加した子供たちへの調査

ジュニア・プロデューサーは、一般公募で集まった川崎市内の小学4～6年生が、東京交響楽団メンバーが登場する演奏会をプロデュースするプログラムで、2013年より実施されている。例年10名前後の子どもたちが、7月の本番に向けて4月から準備を開始し、コンサート当日まで仲間とアイデアを出し合い、コンサートを作り上げる。リトル・ミューザは、ジュニア・プロデューサーを経験した子どもたち(小学校高学年～高校生)がジュニア・プロデューサーの活動をサポートする立場で参加するプログラムである。そのため、いずれの活動にもミューザの職員や東京交響楽団メンバーが深く関わっている。

2017年11月にジュニア・プロデューサー8名、リトルミューザ9名に対してアンケートと補足インタビューが行われた(調査の概要と結果はp.8を参照)。その中に、「ジュニア・プロデューサーに参加する前との変化」に関する以下5項目の質問がある。(いずれも、アンケート調査(問3,4)の設問を子どもたち用に書き換えたもの)

- ①いま住んでいるところ(かわさき市)が好きな気持ち
- ②だれかのお手伝いができている／役に立っているという気持ち
- ③かわさき市について、だれかに自慢したい気持ち
- ④かわさき市では、音楽などの芸術が楽しめると感じる気持ち
- ⑤ぜんたいとして、いまの生活は楽しいと感じる気持ち

ジュニア・プロデューサー、リトル・ミューザのメンバー全員が、全項目について「参加する前より、(気持ち)強くなっている」または「変わらない」と回答しているが、とりわけリトルミューザ9名の回答は、①～⑤すべての項目において「強くなっている」(8名)、「変わらない」(1名)という驚くべき結果となった。また、他の質問(活動の感想、活動して変わったこと、クラシック音楽や楽器への興味の深まりなど)についても、ジュニア・プロデューサーの子どもたちと比較すると、よりポジティブで自己肯定的な回答が得られている。

サンプル数が限られており、この調査結果だけで一般化することは難しいかもしれないが、地域に根差したホールとフランチャイズ・オーケストラが連携したプログラムに、子どもたちが継続的に関わり多くの経験を共有した結果、まちへの愛着／貢献意識や満足度、意欲が増したと考えることができるのではないだろうか。

3.市民の声

次に、アンケート調査の(問7)自由記述欄に着目する。(問6)で「地域を拠点として活動するオーケストラに期待する活動」を3つまで選んだ後、(問7)「その他、地域を拠点とするオーケストラに期待する活動があれば自由にお書きください」という問いかけがされている。

全回答者705名のうち、約21.1%にあたる149名よりコ

メントが寄せられ、その多くが「より広い世代の市民が気軽にオーケストラに触れる機会を増やしてほしい」「もっと活動のPRを」など、設問に沿った内容であったが、東京交響楽団の活動を知っていて参加経験がある層からは、フランチャイズ・オーケストラへの思いや川崎市への愛着、生活満足度、文化芸術環境に対する意識や評価に関連した、以下のような記述を拾い上げることができる。

「プロのオーケストラを持つ川崎市の音楽に対する姿勢を高く評価いたします。音楽芸術は、人生を過ごすて行くうえで、多くの人にとって、とても大切な一側面を持っていると思います。」(70～74歳。30年在住)
「新百合ヶ丘周辺は「音楽のまち川崎」にふさわしい環境で幸せを感じる」(70～74歳。25年在住)
「これからも市民を楽しませていただきたい」(75歳以上。40年在住)
「今後も継続支援したい」(75歳以上。30年在住)
「生の演奏に振れる体験はとても貴重でありたい」(65～69歳。40年在住)
「近所でコンサートが聴けるということが非常に嬉しい」(30代。7年在住)
「ミニコンサートでは、団員の人がうかがえ親近感がわく」(60～64歳。50年在住)
「音楽がない世界なんて寂しいものです」(75歳以上。50年在住)
「音楽のまち川崎とても楽しんでいます」(65～69歳。30年在住)
「気軽に本物の音楽が聴けるのはとても良い。心が洗われる思い」(50代。21年在住)

(一部抜粋。アンダーラインは筆者)

これらは、該当項目を選んでチェックするアンケート調査では見えにくく、自由記述によって浮かび上がった、市民の「クオリティ・オブ・ライフ」に関するコメントであるといえよう。

4.まとめ

東京交響楽団が川崎市に拠点を置いて活動することによって、市民の生活がどのように変わった(変わる)のか。本稿では、定量評価とは別の観点から、「市民の変化」と「フランチャイズ・オーケストラ」だからこその期待と評価について、キーワードやエピソードを探った。

これらのエピソードを継続的に積み重ね、定量評価とともに成果として示していくことで、「フランチャイズ・オーケストラ」が市民の「クオリティ・オブ・ライフ」の向上に果たす役割をより明確に「見える化」することが可能となるのではないだろうか。

フランチャイズ・オーケストラと活動拠点

公益財団法人東京交響楽団 フランチャイズ事業本部 桐原美砂

2004年よりフランチャイズ・オーケストラとして川崎市に居を得て、15年目が近づいている。音楽は人をどう幸せにするか、オーケストラが身近にあることは幸せにつながると実証できるのか。今回の調査研究では、そんな難題からスタートした。

当初3年かけて取り組む予定であった当事業において、仮説を証明するような因果関係を示すことは難しいとされながら、まずは1年の調査である程度の相関関係を見ることが出来たことに感謝したい。またTOKYO2020や、2024年の川崎市制100年に向けて行っている川崎市のさまざまな取り組みのなかで、芸術団体が自治体・拠点となる劇場・音楽堂とよりよく協働するために、新たな仮説の構築と課題に向き合う好機を得たと考えている。



アウトリーチ「0歳からのオーケストラ・ミニキャラバン」

まずはオーケストラ自身が持つ資源の再確認。先端的な高水準の芸術活動から、規模の小さいアウトリーチコンサート、本格的な室内楽から、参加者と一緒に作り上げる創造的な活動、さまざまな場面で、質の高い生の音楽を提供する人材・プロデュースする人材を活用する場を創造し、また育成すること。

オーケストラという芸術団体が持つ資源は、演奏という分野にとどまらない。「音楽のまち・かわさき」の名の下、市民の音楽活動が非常に活発な川崎市において、プロフェッショナルが身近にいることは、市民の演奏技術水準を上げる一助となりえる

し、鑑賞機会の拡大のみならず、音楽家が人として魅力ある人材である点も見逃せない。あこがれる存在、また共に活動するパートナーとしての側面を持ちながら、オーケストラの持つ新たな価値に目を向ける必要がありそうである。

また、本拠地であるミュゼ川崎シンフォニーホールにおいての高水準の芸術活動をさらに進めると共に、音楽を通じた共生社会の実現へ向けてのミッションを共有し、連携を深め、音楽堂を中心とした地域社会への音楽資源の提供を行うこと。

ミュゼ川崎シンフォニーホールとの取り組みは、すでに多岐にわたっており、制作スタッフ同士の意識の共有・情報交換などは日常的に行われている。ホールの価値を高めることとオーケストラの価値を高めることは比例しており、ハード面、ソフト面での立ち位置の違いも尊重しながら、さらなる協力を結ぶことにより、より高水準の芸術活動や社会的にインパクトある事業展開が見込めるはずである。



3月7日 VRオーケストラ体験の様子

©ヒダキトモコ

さらには、文化政策分野のみならず、教育・福祉・街づくり・医療・安全・経済・産業など、市や地域社会のニーズ・課題を共有し、専門性を生かした事業の提案や音楽資源の提供、市内の団体との連携やネットワークの構築を行うこと。

オーケストラに期待できることは「コンサート」だけではない。専門性の高い知見・アーカイブ・人材をもつ芸術団体だからこそできる音楽を通じた活動や、音楽があることでつながる成熟したコミュニティの形成への提案は、まさに「音楽のまち・かわさき」に相応しいといえる。

AIの進歩とともに、10年後には今ある職業の7割がコンピューターに取って代わられるとしたオックスフォード大学の調査のニュースは非常にセンセーショナルなものであった。一方で人の幸せのありかたは、古来より大きく変わっていない。衣食住の安定、人とのつながりと共に（音楽に限らず）文化芸術へアクセスは人の幸福感・満足感に大きな影響力を持っており、個人と社会の心身健康維持のためにも整えなければならないインフラであるといえる。



アウトリーチ「東京交響楽団 ～みんなで集えるコンサート ミニ」

本調査は1年限りとなったが、今後も定点観測的に調査を行い、中・長期的視野で事業の見直しや課題への考察は常に求められるだろう。だれもが幸せである社会をめざして、オーケストラなどのプロの芸術団体・拠点文化施設・自治体それぞれがお互いの価値を認め、ミッションに向き合い、ゆるやかでありながらも、多面的に連携していく、そのような姿がどこの街にでも実現できる社会であることを期待したい。

東京交響楽団

1946年、東宝交響楽団として創立。1951年に東京交響楽団に改称し、現在に至る。

2004年7月より、川崎市のフランチャイズオーケストラとしてミュゼ川崎シンフォニーホールを拠点に定期演奏会や特別演奏会を開催するほか、市内での音楽鑑賞教室や巡回公演、川崎フロンターレへの応援曲の提供など多岐にわたる活動を行う。これらが高く評価され、2013年に第42回川崎市文化賞を受賞。また、文部大臣賞、京都音楽賞大賞、毎日芸術賞、サントリー音楽賞など日本の主要な音楽賞の殆どを受賞している。

新国立劇場では1997年の開館時からレギュラーオーケストラとして毎年オペラ・バレエ公演を担当。教育面でも「こども定期演奏会」「0歳からのオーケストラ」が注目されている。海外公演も多く、これまでに57都市76公演を行っている。

音楽監督にジョナサン・ノット、正指揮者に飯森範親、桂冠指揮者に秋山和慶、ユベール・スダーン、名誉客演指揮者に大友直人を擁する。2016年に創立70周年を迎え、同年10月ウィーン楽友協会を含むヨーロッパ5カ国で公演を行い、各地で高評を得た。

公式サイト:<http://tokyosymphony.jp/>

事業報告

ファンタスティック・オーケストラ ～みんなで集えるコンサート～

(開催日時:2018年3月7日 16:00開演 会場:ミュゼ川崎シンフォニーホール)

公益財団法人東京交響楽団 チケット販売本部 佐藤 雄 己

概要

本コンサートは、平成29年度戦略的芸術文化創造推進事業「フランチャイズ・オーケストラを中心とした市民のクオリティ・オブ・ライフの調査と向上のための事業」における、実際の社会包摂事業に位置づけられる。福祉施設(4施設)へのアンサンブル演奏会とVR機材によるオーケストラ体験を組み合わせたアウトリーチ活動と連動し、障がい者を中心に、高齢者・青少年など、社会を構成する多様な人々が集まれるコンサートを開催することで社会包摂を体現し、また、共生社会実現への機運を高める目的で開催した。

コンサート開催にあたり

①本コンサートは「耳の聞こえない人にも、音楽を届ける」というコンセプトの下に発案された。「聴覚」にハンデのある人でも、「触覚」および「視覚」で音楽を楽しんでもらえるよう、「体感音響システム席」とプロジェクション・マッピングによる映像演出を導入した。加えて、演奏会中のナレーション(曲紹介など)を手話通訳者を介して同時通訳するなど、耳が聞こえないことによる障壁がなくなるようできる限り配慮した。さらに、プライオリティ・サポート(車椅子席の拡充・点字プログラムの用意等)を充実させることで、聴覚障がい者だけでなく、視覚障がい者や身体障がい者も来場しやすくなるように工夫した。



プロジェクション・マッピングの様子
©ヒダキトモコ



体感音響システム席
©ヒダキトモコ

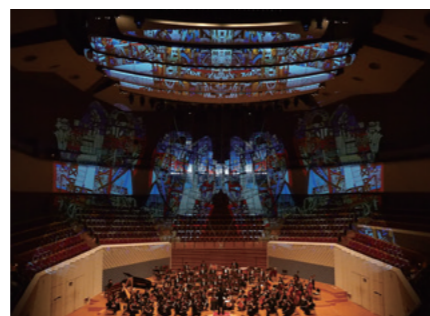
②コンサート趣旨をより分かりやすく、かつ、プロオーケストラの実演としてふさわしいものへと昇華させるため、曲目および演出も吟味した。曲目面では、オーケストラ演奏だけでなく、ソリストに全盲の学生として初めて東京藝術大学音楽学部声楽科へ入学したソプラノの橋本夏季(はしもとなつき)さんを起用することで、広く親しみやすくなるよう心がけた。一方、演出面では、ゲストスピーカーとして、川崎市在住であり、リオデジャネイロパラリンピック(2016年)に出場し銅メダルを獲得したウィルチェアーラグビー選手の山口貴久(やまぐちたかひさ)さんにご登場いただいた。また、パラアート団体である「studio FLAT(スタジオフラット)」で活躍する複数のアーティストの絵画をプロジェクション・マッピング映像に使用し、実演芸術による社会包摂事業に厚みを持たせた。



ソプラノ 橋本夏季
指揮 角田鋼亮
©ヒダキトモコ



ウィルチェアー
ラグビー選手
山口貴久
ナビゲーター 朝岡 聡
©ヒダキトモコ



プロジェクション・
マッピングの様子
(Studio FLAT作品)
©ヒダキトモコ

③実演芸術による社会包摂事業に欠かすことのできない、地域での「横断的な文化芸術団体のネットワーク」を形成するべく、さまざまな団体と協働した。本拠地であるミュゼ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)との密な連携をはじめ、川崎市、川崎市教育委員会、社会福祉法人川崎市社会福祉協議会に後援を仰ぎ、また公益財団法人川崎市老人クラブ連合会には高齢者への周知広報等でご協力いただいた。

加えて、地域の中高生が「子どもジャーナリスト」として、その地域の文化芸術取材し広めていく取り組みである「文化プログラムプレスセンター」(主催:文化庁、一般社団法人共同通信社)と提携することで、情報発信およびレガシーづくりにも積極的に関わった。



子どもジャーナリストへのレクチャー風景
©文化プログラムプレスセンター

結果

「音楽会 聞こえなくても満喫一振動 映像駆使「みんなで」との見出しで紹介された読売新聞をはじめ、毎日新聞、神奈川新聞、東京新聞TODAY、タウンニュース(川崎区・幸区版)などの紙媒体を中心に、SNSでも広く取り上げられたこともあり、会場定員1,387名に対して、来場者は1,134名と、約82%の入場率を達成した。来場者へのアンケート(回答者140名)では、1点～最高5点とした場合の、演奏会内容「満足度」の平均値は4.6点であり、VRブース(オーケストラ体験用)や展示ブースなどの満足度は4.3点と、他項目と比べてやや低い値となった。

本コンサートへの来場理由をたずねる項目(複数回答可能)では「演奏会趣旨に関心があったから」(54名)が最も多く、「会場がミュゼだから」(51名)「プロジェクション・マッ



コンサートの様子

©ヒダキトモコ

ングが見たいから」(50名)「オーケストラが聴きたかったから」(47名)と続いた。本拠地ミュゼを起点としたフランチャイズ・オーケストラによる地域社会における社会包摂事業として、おおむね高い評価を得たとと言える。

小括

本コンサートに対しておおむね高評価を得、お客様からお褒めの言葉も頂戴する一方で、「何を伝えたいのかわからない。とてもつまらなかった」など厳しいお声もあった。「みんなが集える」からこそすべての人が満足できないという逆説的な問題に対して、その均衡点を定置する難しさを痛感させられた。地域共生社会に資する「音楽のバリアフリー」は、ハードやソフト面だけでなく、人間理解を含めた丁寧な問いと答えを繰り返しながら、多角的に拡充させていく必要があるだろう。

東京交響楽団ファンタスティック・オーケストラ ～みんなで集えるコンサート～

【出演】

指揮:角田 鋼亮 ソプラノ:橋本 夏季
スペシャル・ゲスト:山口 貴久(ウィルチェアーラグビー選手)
ナビゲーター:朝岡 聡 管弦楽:東京交響楽団

【曲目】

ビゼー:「カルメン」第1幕への前奏曲
フォーレ:「レクイエム」より「ピエ・イエス」
モーツァルト:演奏会用アリア「はげしい息切れとときめきのうちに」
アンダーソン:シンコペーテッド・クロック
宮川彬良:シンフォニック・マンボNo.5
ストラヴィンスキー:火の鳥(1919年版) ※プロジェクション・マッピングつき



TOKYO SYMPHONY ORCHESTRA

Jonathan Nott, *Music Director*

本冊子へのご意見、ご質問等は下記までご連絡ください。

東京交響楽団〈川崎オフィス〉

〒212-8554 神奈川県川崎市幸区大宮町1310 ミューザ川崎セントラルタワー5階
TEL:044-520-1518 FAX:044-543-1488



文化庁委託事業「平成29年度戦略的芸術文化創造推進事業」

**「フランチャイズ・オーケストラを中心とした
市民のクオリティ・オブ・ライフの調査と向上のための事業」事業報告書**

2018年3月30日発行

発行／公益財団法人 東京交響楽団 〒169-0073 東京都新宿区百人町2-23-5

禁無断転載・複製